

祖先のあゆみ

摂津の歴史



摂津市教育委員会

摂津の歴史

摂津市域は、今から4、5千年前、縄文期に淀川水系の沖積作用と僅かな隆起作用とによって形成されたようである。淀川の河床や千里丘陵につづく市域北部からは、弥生期の遺物や遺構が出土し、このころには市域において人々の生活が営まれていた。

古くは、市域は三嶋^{みしまの}あがたに属し、大化改新のころには味経宮^{あじふのみや}が営まれ、奈良時代には摂津国島下郡^{しましもごおり}に属し、市域北部では条里制^{じょうりせい}が施行されていた。

自然流にまかされていた淀川はたびたび洪水をおこしたので、治水と舟運を目的に延暦7年(788年)には、当時摂津職^{せつつしき}であった和気清麻呂^{わけのきよまろ}によって、全く別の水系であった三国川(神崎川)に通じる分流工事が行われた。鳥飼付近の淀川氾濫原や中州には、律令政府^{りつりょう}によって鳥養^{とりかい}牧^{まき}が設けられ、牛や馬が放牧されていた。また、淀川を舟で往来する貴族たちはこの地を停泊や休息に利用し、宇多天皇^{うた}も離宮鳥養院を営み、しばしば行幸されたという。

摂関政治が全盛の11世紀のころには、安威川以北の市域は、藤原氏やその氏寺の興福寺などの荘園となり、後には安威川以南まで開発が進められた。

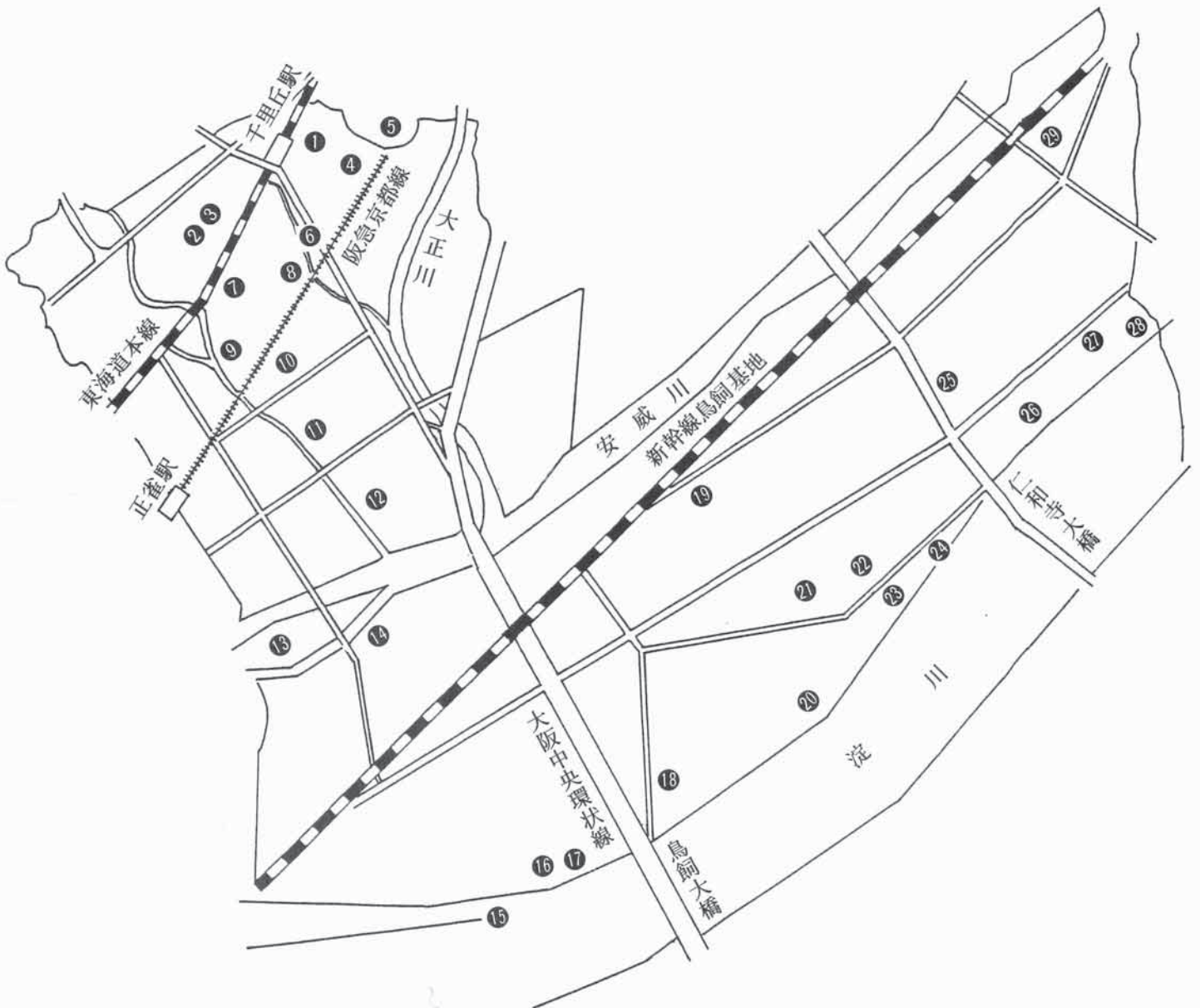
室町時代には、民衆の力が強くなり、産業が栄えるにつれて淀川は流通路として活気を帯び、千里丘地域を横切る亀岡街道の往来も増加した。

戦国時代になると戦乱の嵐は市域にも吹き荒れ、織田信長や中川清秀ら武将の陣が張られた。流れの馬場は石山合戦の戦場の跡である。豊臣秀吉の天下統一の際には、太閤検地が実施され検地帳が残されている。

江戸時代には、市域が畿内・西国を支配するための拠点であった大阪城の周縁という政治的・経済的に重要な位置にあるため、味舌地域は主に幕府と淀藩・大和国芝村藩によって分有され、三宅や味生地域は天領として、鳥飼地域は高槻藩領として、複雑な支配が行われた。

明治4年の廃藩置県により、市域は大阪府管下に統合され、同22年に町村制が施行されて、味舌・鳥飼・三宅・味生の各村が誕生した。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|--------|-------------|--|
| ① 防風庵跡 | ⑬ 虎の宮の火 | ⑭ 伏越樋門跡 | ⑮ 神崎川分岐点跡 | ⑯ 三ツ樋 | ⑰ 三本松天神社跡 | ⑱ 藤森神社 | ⑳ 鳥養牧跡 | ㉑ 鳥養の渡し跡 | ㉒ 段倉 | ㉓ 黒丸城の跡 | ㉔ 宗慶島 | ㉕ 囲み堤 | ㉖ 実正樋跡 | ㉗ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | |
| ② 金剛院と蜂塚 | ⑭ 味舌天満宮と織田有楽 | ⑮ 明善寺と木下勘兵衛の戦死 | ⑯ 防風庵跡 | ⑰ 宮ノ下渡船場跡 | ⑱ 恵照院殿积寿栄大童女の墓碑 | ⑲ 井路と井路舟 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | |
| ③ 不動明王立像 | ⑮ 明善寺と木下勘兵衛の戦死 | ⑯ 虎の宮の火 | ⑰ 伏越樋門跡 | ⑱ 神崎川分岐点跡 | ⑲ 防風庵跡 | ⑳ 宮ノ下渡船場跡 | ㉑ 恵照院殿积寿栄大童女の墓碑 | ㉒ 井路と井路舟 | ㉓ 三ツ樋 | ㉔ 三本松天神社跡 | ㉕ 藤森神社 | ㉖ 鳥養牧跡 | ㉗ 鳥養の渡し跡 | ㉘ 段倉 | ㉙ 黒丸城の跡 | ㉚ 宗慶島 | ㉛ 囲み堤 | ㉜ 実正樋跡 | ㉝ 離宮「鳥養院」の跡 | |
| ④ 宝光山常楽寺跡 | ⑯ 防風庵跡 | ⑰ 宮ノ下渡船場跡 | ⑱ 恵照院殿积寿栄大童女の墓碑 | ⑲ 井路と井路舟 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | |
| ⑤ 三宅城と三宅国村 | ⑰ 宮ノ下渡船場跡 | ⑱ 恵照院殿积寿栄大童女の墓碑 | ⑲ 井路と井路舟 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | |
| ⑥ 流れの馬場跡 | ⑱ 恵照院殿积寿栄大童女の墓碑 | ⑲ 井路と井路舟 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | |
| ⑦ 弥栄の樟 | ⑲ 井路と井路舟 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | |
| ⑧ 条里制 | ⑳ 三ツ樋 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | |
| ⑨ 子安地藏 | ㉑ 三本松天神社跡 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | |
| ⑩ 井関敬順師顕功碑 | ㉒ 藤森神社 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | |
| ⑪ 味舌天満宮と織田有楽 | ㉓ 鳥養牧跡 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | | |
| ⑫ 明善寺と木下勘兵衛の戦死 | ㉔ 鳥養の渡し跡 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | | | |
| ⑬ 虎の宮の火 | ㉕ 段倉 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | | | | |
| ⑭ 伏越樋門跡 | ㉖ 黒丸城の跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| ⑮ 神崎川分岐点跡 | ㉗ 宗慶島 | ㉘ 囲み堤 | ㉙ 実正樋跡 | ㉚ 離宮「鳥養院」の跡 | | | | | | | | | | | | | | | | |



目 次

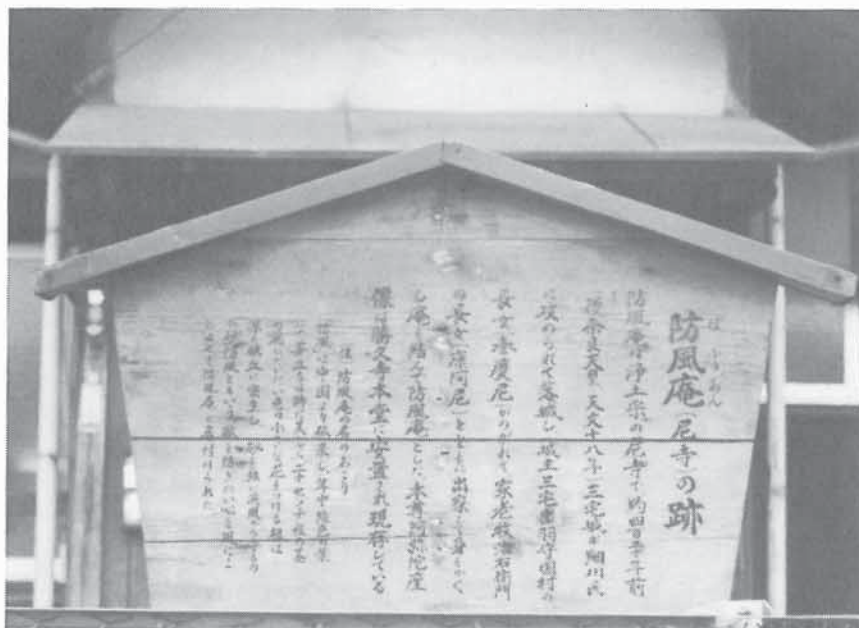
1. 防風庵跡	1
2. 金剛院と蜂塚	2
3. 不動明王立像	3
4. 宝光山常楽寺跡	4
5. 三宅城と三宅国村	5
6. 流れの馬場跡	6
7. 弥栄の樟	7
8. 条里制	8
9. 子安地藏	9
10. 井関敬順師顕功碑	10
11. 味舌天満宮と織田有楽	11
12. 明善寺と木下勘兵衛の戦死	12
13. 虎の宮の火	13
14. 伏越樋門跡	14
15. 神崎川分岐点跡	15
16. 宮ノ下渡船場跡	16
17. 恵照院殿釈寿栄大童女の墓碑	17
18. 井路と井路舟	18
19. 三ツ樋	19
20. 三本松天神社跡	20
21. 藤森神社	21
22. 鳥養牧跡	22
23. 鳥養の渡し跡	23
24. 段倉	24
25. 黒丸城の跡	25
26. 宗慶島	26
27. 囲み堤	27
28. 実正樋跡	28
29. 離宮「鳥養院」の跡	29
30. 埋蔵文化財	30
31. 「明和池遺跡」の調査	31～32
32. 「摂津の歴史」年表	33～35

1. 防風庵跡 (千里丘東1丁目6)

浄土宗の尼寺で、天文16年(1547年)三宅城が細川氏に攻められて落城し、城主三宅出羽守国村は城と運命をともにしたが、長女(春慶尼)は難を逃れ、家老牧治衛門の長女(康阿尼)とともに出家し、身をかかし庵を結んで防風庵とした。

「防風」は中国より伝来の植物で、根は深く砂丘に密生し、砂を強く浜風から守るので砂防風ともいう。敵を防ぎたい心を風にことよせて防風庵と名付けられた。

▼顕彰札



2. 金剛院と蜂塚はちづか(千里丘3丁目10)

金剛院は、蜂熊山はちくまと号して真言宗に属し、薬師如来を本尊とする。寺伝によると、天平10年(738年)、一老翁が遊歴ぎょうきの僧行基に珍菓を供しながら、「この地は霊地なり一寺の建立を乞う」といい、消え去ったという。行基は薬師如来を刻み本尊となし、放光山味舌寺ほうこうざんましだじと名付けた。その後、鎌倉時代の初頃、この地に賊徒が蜂起し、官軍はこれまでという時、本尊薬師如来に祈念したところ、群蜂出現して勝利を得たという。その折餓死した蜂を武具と共に埋め供養したのが「蜂塚」、である。これより寺名を蜂熊山(霊蜂山)蜂前寺金剛院はちくまやま れいほうざん ようぜんじ こうごういんと改められた。またその後、戦火に焼かれた伽藍おだうらくさいは織田有楽斎所領の折り、再建され、7代目藩主織田丹後守すけよし輔宜殿の代にようやく往古の面影を取り戻したという。

2代目藩主織田豊前守長定殿の再建した護摩堂に安置されている不動明王立像は昭和29年8月10日に大阪府重要美術品に指定されている。

金剛院本堂と護摩堂▶



◀境内にある蜂塚

3. 不動明王立像(千里丘3丁目10)

金剛院の護摩堂の本尊、不動明王立像は寄木造りの等身像で「摂津名所図会」によれば、弘法大師の作と伝えられているが、その手法から推察して平安後期の作と推定される。

(昭和29年8月10日大阪府重要美術品に指定)

▼不動明王立像

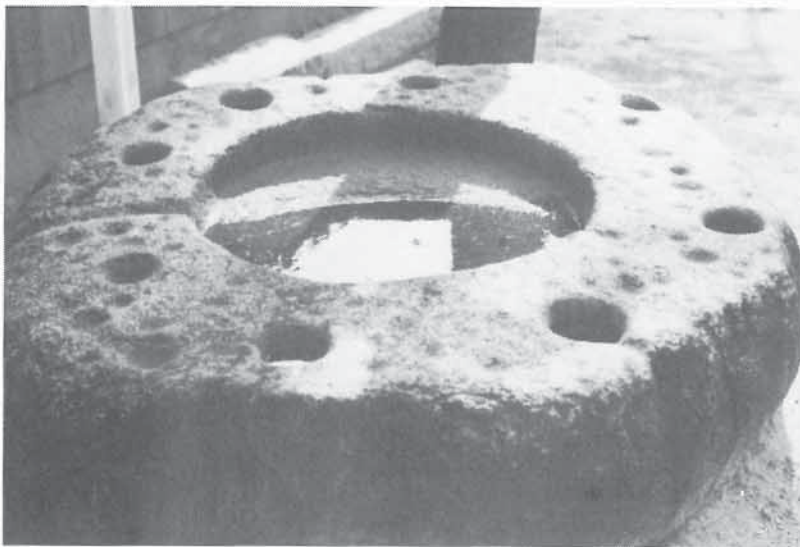


ほう こう ざんじょうらく じ

4. 宝光山常楽寺跡(千里丘東1丁目5)

常楽寺は真言宗の寺で僧行基ぎょうきが天平10年(738年)に建てたと伝えられる。創建当時の境内は東西約86m、南北約36mで釈迦堂・観音堂などがあり、本堂の屋根は遠くから見えるほど高く大きいものであったという。

元和年間(1615~24年)頃には公家の祈祷所になってにぎわったが焼けてしまい、その後元禄13年(1700年)に再建されたが、かつては三宅城主三宅出羽守の菩提寺として近郷の信仰をあつめたこともあった。明治6年(1873年)に廃寺となり、今は山門の一部が井於神社いお くらがうち(茨木市蔵垣内3丁目)に移築され残っている。



◀花崗岩の塔心礎石
(万福寺=茨木市)
(直径70cm、深さ9cm
の柱座)

▼移築された山門(井於神社=茨木市)



み やけ く に む ら

5. 三宅城と三宅国村(茨木市蔵垣内)

天文年間(1532~55年)、一向一揆の騒乱の中で三宅城主三宅出羽守国村は、戦乱の世の常とはいえ、怪奇きわまる出所進退をとる。もともと細川氏の輩下にあった三宅氏は、ある時は細川晴元に組するが、後、一向宗徒となり、細川氏内紛のあと高国の弟晴国をかついで晴元に敵対する。時に利あらずとみるや、晴国を殺して晴元に降参する。また、細川家内紛のあとをうけて、晴元に対して氏綱を擁立する勢力が晴元方と戦うとき、再び晴元を敵にまわす。

天文16年(1547年)、晴元は総勢力を摂津に投入し、2月25日に三宅城を包囲する。戦況不利とみた国村は使者をたて降伏し城を明け渡した。

三宅城の落城については、村方文書に異伝がある。「三宅系図」(茨木市寺井氏文書)には、落城を3月29日とし、そのさい国村・永清兄弟が切腹して果て、国村の後室も1男3女の4人の子を逃がしたのち自刃したとある。また、「三宅継図」(池田市三宅氏文書)には、落城を3月晦日とし、永清は戦死または自害とあり、国村の生死については記されていない。



◀三宅城の石碑

6. 流れの馬場跡(千里丘東3丁目1)

天正8年(1580年)石山合戦に本願寺の光佐が織田信長と戦った時、本願寺に味方した勝久寺住職頓恵は、摂津・河内・泉州の僧俗たちとともに石山城にたてこもった。

和睦が成立した同年5月、勝久寺本堂で法要が営まれていた時、折しも大阪へ向かう信長の軍勢がここを攻め本堂を焼き、信徒を殺害した。屍が山と積まれ、あたり一面は血の海となったので、寺の前方を流れる境川を「流れの馬場」と呼ぶようになった。また屍を通称小坪井墓の西の谷に埋めたので、ここを「屍谷」と言い伝えている。

昭和28年に有名な「鶴寿の松」が枯れた。

勝久寺の前に立つ石碑▶



▼境川の堤防添いに立つ石碑



7. 弥^や栄^{さか}の樟^{くす}(千里丘東5丁目3)

天保14年(1843年)9月の嶋下郡味舌郷の図面に金剛院持、と記されている弥栄の樟は、かつてこの付近も金剛院の一部であったことを物語っている。聖武天皇の天平年間(729~48年)の植樹という伝承があり、昭和初期の味舌村は「弥栄の樟」と命名し厚く保護をした。

▼弥栄の樟



8. 条^{じょう}里^り制^{せい} (千里丘東4丁目1)

条里制とは古代(7～8世紀)におこなわれた土地区画整理制度のことである。この制度によると当時、東西南北6町(約654m)の間隔で土地を正方形に区画し、6町四方(約43ha)の面積の土地を里と呼んだ。

また、この里の各辺を6等分し、合計36の四方形の土地に分け、この1町四方(約1.2ha)の土地を「坪」といい、当時は坪単位に分かれていた。その名残は、かつて坪井^{つばい}村という地名があったことから推察することができる。摂津市域の坪井付近(千里丘東4丁目)は、旧嶋上郡・旧嶋

▼坪境石・けんか石と呼ばれる花崗岩



下郡と展開されてくる三嶋条里の方向が転換する地域であることが知られている。坪井以西の条里は西へ33度方位を変えており、西方の吹田市域へ展開する条里の起点となっている。

この付近から6個の石が発見され「坪境石」・「けんか石」とも伝えられている。条里制の遺構の近くには石組の水門を見る例が多い。これらの石は境川沿いに並んで埋められていたもので境界領域を示すとともに、水利のために利用された石であるといわれている。

9. ^こ子 ^{やす}安 ^じ地 ^{ぞう}蔵 (庄屋1丁目3)

子安地蔵は木像で、今から1000年以上前に造られたと伝えられている。人々は、安産を祈ってこの地蔵尊を信仰してきた。

また、この社の中には「子安地蔵」とともに銅製の「釈迦誕生仏」「五輪塔」の一部(応仁2年=1468年と刻字がある)および「珂雪童子の像」などがまつられ、現在に至るまで多くの厚い信仰をうけている。

▼子安地蔵



い ぜき けいじゆん

10. 井関敬順師顕功碑(東正雀14)

明治のはじめ、学制が発布(明治5年8月)されて間もない頃、当時の第4小区第2番小学校(現味舌小学校)の教員であった慶徳寺住職きやうとくじの井関敬順は、常々児童の心身の発達や地域の実情に即応したものを用意する必要性を痛感していた。そこで日常重要熟字3300余を収録した「日用熟字編」を編集し、自費で出版した。当時の大阪府学務課長日柳政惣はこの本を絶賛し、教科書として府下一円で広く採用された。また同じく算術基本練習100題を収めた「算法百好集前後」「算学偶記」、児童の道德書として「道德階梯=貧困豫防論」を著している。このほかにも「改良算盤」と称する教授用の大算盤なども工夫し、教育揺籃期の大阪に大きな影響を与えた。寺内にある顕功碑は明治35年2月、65歳で死去した敬順を慕う人たちの手によって、翌年建立された。

▼慶徳寺境内にある顕功碑



▼井関敬順が編集した本など



11. 味舌天満宮と織田有楽（三島3丁目9）

菅原道真を祭神とする味舌天満宮は、源満仲の弟多田満政の9代の孫摂津国止々呂美（箕面市）城主馬場兵衛信高のぶたかの9代の孫馬場当次郎尚久なほひさが味舌郷の一邑を開拓し、氏神として八幡大神を勧請し馬場宮と号したのが起源である。

織田信秀（信長の父）の奥室懐妊のとき静養のため有馬の霊泉へ赴く途中、味舌の里に憩い当宮に安産を祈願した。間もなく天文16年（1547年）に長益ながます（有楽）うらくが生まれた。信長とは13歳違いの弟である。長益は長じて武を好まず風流を志し、千利休に茶道を師事し奥義をきわめ、有楽流という一派を興した。この長益の第5子である尚長なほながが当地で生まれたので、寛永12年（1635年）9月に現社殿を造営する。

味舌天満宮本殿と摂社八幡神社は平成5年11月24日に大阪府指定有形文化財に指定された。

▼味舌天満宮



みょうぜん じ

12. 明善寺と木下勘兵衛の戦死(三島2丁目11)

明善寺は真宗大谷派に属し「大阪府全誌」によれば、開基は味舌天満宮を創始した馬場当次郎尚久の3代馬場当次郎尚次なおつぐである。尚次は実如じつによに帰依し明善と改め、永正5年(1508年)にこの寺を建立した。

4代馬場崎右衛門正義う えもんまさよしは石山合戦(1570～80年)で本願寺に味方し、武勇・知謀とも群を抜き、軍師となって活躍したといわれる。しかし、それが災いして和睦後の天正8年(1580年)の夏、織田信長は正義討伐のために丹羽長秀の率いる3000騎を味舌に向かわせた。これを知った正義は摂津国止々呂美村とどろみ(箕面市)に逃れ、家臣の木下勘兵衛という強勇が正義の身がわりとなって討死し、一本松(三島2丁目13)に埋葬した。難を逃れた正義は再び味舌に帰り正義入道と号した。

木下勘兵衛の供養塔は味舌下(正雀4丁目15)の共有墓地内にある。これを知った教如が、木下家に本尊を賜ったので、身がわり本尊といわれたことが今に伝承する。木下家は三島3丁目4-37にある。



◀木下家に伝わる身がわり本尊

▶明善寺



◀木下勘兵衛の墓

とら みや 13. 虎の宮の火の伝承 (浜町 9)

「別府田圃の中、虎の宮という神祠の古跡あり。土地の人は火魂と呼ぶ。此の森より雨夜に火魂出で、……」（摂津名所図会）この火魂が片山村（吹田市）の樹上にとまり、これを見た人は大変恐れたが、火縄を見せるとその火魂はすぐに消えたという。

この「虎の宮」は現在味舌天満宮ましたに合祀され、「寅之宮橋」にその名残をとどめているのみである。

虎の宮の名残りをとどめる ▶
寅之宮橋



◀ 味舌天満宮にある虎の宮

ふせこし ひ もん

14. 伏越樋門跡(東別府5丁目4)

慶安4年(1651年)高槻藩主永井直清は、安威川の川床が高くなり排水が困難になったため、それまでもっと上流で安威川に直接放流していた鳥飼の悪水(灌漑の後の不用水)を、当時としては高度な技術を駆使して悪水抜樋を別府に構築する。これが伏越樋であり、安威川を潜って吉志部村(吹田市)まで井路(排水路)を延長し、神崎川に落とすことに成功した。

その後も悪水を除くために幾度かの改修が行われ、とりわけ天明6年(1786年)大改修が行われた時の樋門は大正5年に神崎川に放流する樋門工事の完了するまでこの土地の稲作に大きく貢献した。



◀ 顕彰札



◀ 鳥飼井路(左)と番田井路(右)から伏越樋門があったあたりを望む(左手奥)

かんざきがわ

15. 神崎川分岐点跡(一津屋2丁目)

古代から淀川は流域住民に恩恵をもたらすと同時に、洪水という恐怖をも与えた。延暦7年(788年)に摂津職せつしき だいふの大夫であった和氣清麻呂わけのきよまろが「河内・摂津両国の堺に川を掘り、堤を築き、荒陵あればかの南より、河内川(淀川)を導きて西の方、海に通ぜん」(続日本紀)と淀川の改修工事を天皇に言上し、三国川(神崎川)に通じる水路を掘りひらき、淀川の水を分流させた。分岐点は一津屋から江口(大阪市東淀川区)にいたる間を北流して別府浜にいたり、安威川に沿って流れていた。しかし、その後も水害がたびたび起こり、治水の問題は宿命的な自然と人間との戦いとして、流域住民を苦しめた。

明治11年につけかえ工事(直川化工事)が行われ、その後数回の淀川築堤工事が進められ、神崎川の水量調節と舟運のためのこう門が明治38年に完成した。

▼現在の神崎川樋門(堤防の向うは淀川)



16. 宮ノ下渡船場跡(一津屋 2 丁目18)

宮ノ下渡船場は、河内大庭大切と摂津嶋下郡一津屋村宮ノ下を結ぶ淀川渡船場で、戦国時代末の永禄年間(1558~69年)から存在したと伝えられており、川幅約600mの渡しであった。宮ノ下の小字名の駒頭こまがしらから、駒頭渡しとも呼ばれていた。

昭和29年に日本で最初の有料橋である鳥飼大橋の完成によって姿を消したが、鳥飼の渡しとともに、摂津と河内を結ぶ交通上の重要な役割を果たした。



◀ 顕彰札

▼ 鳥飼大橋



けいしょういん でんしゃくじゅえいだいどうじょ

17. 恵照院殿釈寿栄大童女の墓碑(一津屋2丁目6)

元禄13年(1700年)6月、松平縫殿頭ぬいのかみのりしげ乗成が大坂城へ赴く途中息女の急逝にあい誓源寺せいげんじ(浄土真宗本願寺派)にほうむり、墓碑を建て菩提所として丁重にとむらった。

宝歴2年(1752年)菩提供養のため、松平家より藤原国次鑄造の梵鐘と鐘楼堂が寄進され、梵鐘は第二次大戦中に供出されたが、鐘楼堂は現存する。

この墓碑にまつわる後日談がある。天明5年(1785年)松平下野守と松平縫殿頭の玄孫ひょうぶしょうゆうのりとも(孫の孫)兵部少輔乗友が墓参した時、付近の田が一面に水をかぶっているのに不審をいだき、そのわけをただしたところ排水不良のためとわかり、幕府の許可をとって排水路いじ(井路)を開削したので稲作が安定した。

誓源寺境内にある墓碑▶

▼誓源寺



いじ
18. 井路と井路舟(鳥飼和道1丁目)

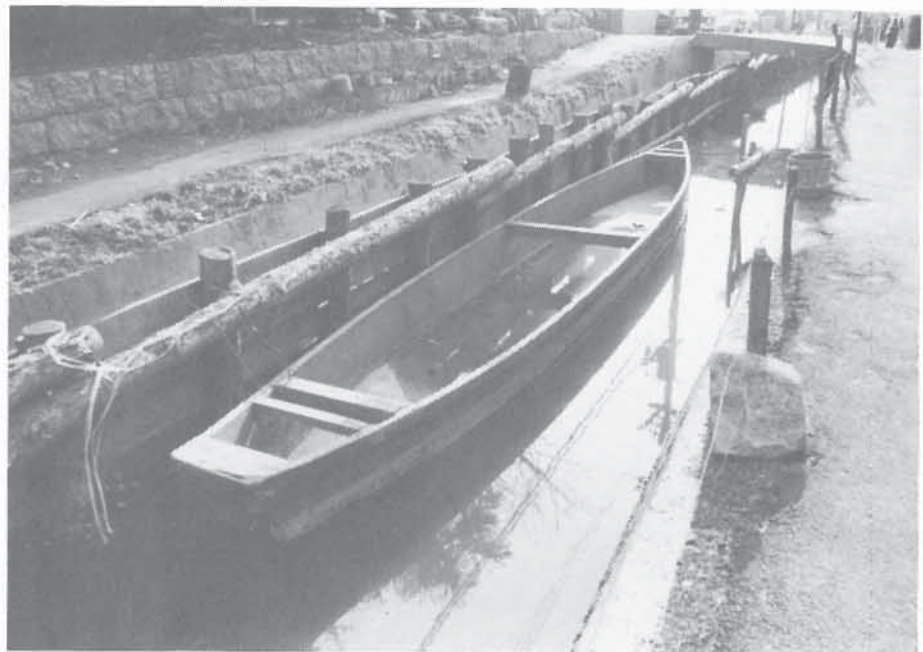
市域の中で特に淀川と安威川にはさまれた地域は、用水の確保と悪水(不排水)の排水を目的として「井路」と呼ばれた水路が数多く掘られた。幅は1mに満たないものから、6mに及ぶものまでである。これらの「井路」は農業生産を飛躍的に向上させた。

また、かつては「井路舟」を使って、収穫物や肥料を運ぶ運搬水路として最近まで利用されていた。



◀用排水路として今も残る井路

かつてはいろいろな運搬に使われた井路舟▶



19. 三 樋 (鳥飼野々3丁目28)

昔から鳥飼農地一帯は大雨になると、淀川右岸低湿地の悪水（灌漑の後の不用水）を集中的に受けてきた。従来からある排水路（井路）を使って安威川に直接放流していたのが、安威川の川床が高くなり充分に排水できなくなった。

慶安3年(1650年)、淀川が決壊し大洪水となったのをきっかけとして、高槻藩主永井直清なおきよが同4年、鳥飼井路の掘削に着手した。その後、多くの改修工事がなされ、大正11年三ツ樋の改築、昭和2年に井路の改修が行われ、300年近い歳月をかけて鳥飼農地一帯の治水事業は一応の解決がみられた。

三ツ樋は、ここに集まる5つの井路の排水を集め、長さ15間(約27m)・敷幅4尺5寸(約1.4m)・高さ4尺5寸の樋門4ヶ所から鳥飼井路へ排水され、それが安威川の川底をくぐって吉志部村(吹田市)で神崎川へ流されていた。それでもなお、排水が不完全であったため大型水車4台を人力で動かすなどの苦労があった。

▼三ツ樋



さんぼんまつてんじんじゃ

20. 三本松天神社跡 (鳥飼西1丁目14)

延喜元年(901年)正月、九州の大宰府に左遷された菅原道真が赴任の途中、鳥飼の地に船を着け食事の後自ら楊枝松を植え、この木が生育することを願って神社を建立したと伝えられる。

「摂津名所図会」には「菅公筑紫御下向の時、ここに船をよせ玉ひし旧跡なり。この村に下り松、義経松、踊り松とてあり」と記されている。この3本の松から、神社の名が起こったとされている。

昭和36年の淀川堤防改修で境内が削り取られ、鳥居だけを残すのみとなったが、それも昭和58年10月に別府1丁目の^{ちゅうしん}中真神社に一部補修し、移転された。

▼鳥居に刻まれた社名



▼淀川堤防の改修のためなくなったが、かつてはこの堤防のあたりに境内があった三本松天神社



▼移築修復された鳥居(中真神社)



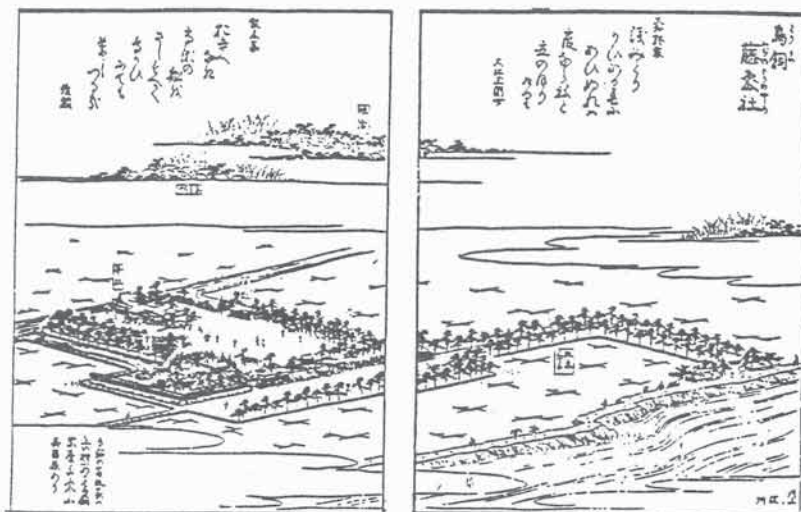
ふじのもり
21. 藤森神社 (鳥飼西2丁目1)

崇道盡敬皇帝 (舎人親王) および菅原道真を祭神とする藤森神社は、崇道盡敬皇帝を山城国の藤森神社から勧請したのが社名の起こりであると伝えられる。

現在の社殿は天明6年(1786年)11月7日に再建されたものである。明治41年に三本松天神社(鳥飼西)・道祖神社(鳥飼中)・若宮神社(鳥飼上)を、同43年に味生神社(新在家)・稲荷神社(鳥飼野々)・稲荷神社(鳥飼八町)を合祀し総社となった。

年中行事で特に秋の例祭は、ネリコミと呼ばれる10月17日の宵宮の宮入りがある。それは地区ごとに献灯用の長提灯を立てて、鉦・太鼓に伊勢音頭で行きつ戻りつしながら境内に入る様は壮観である。

撰津名所図会卷之五▶



▼藤森神社境内



▼宵宮の宮入り



22. 鳥養牧跡(鳥飼下3丁目26)

延長5年(927年)に完成した「延喜式」では、当時の牧は3種類に分けられていた。皇室の料馬を供給する御牧(勅使牧)、兵馬・用役牛の飼育を目的とする諸国牧(官牧)、および都(京都)の周辺に設けた近都牧である。当時牛馬は、ひき牛や乗馬用として多く利用され、特に都では大宮人にとって牛や馬は欠くことのできないものであった。

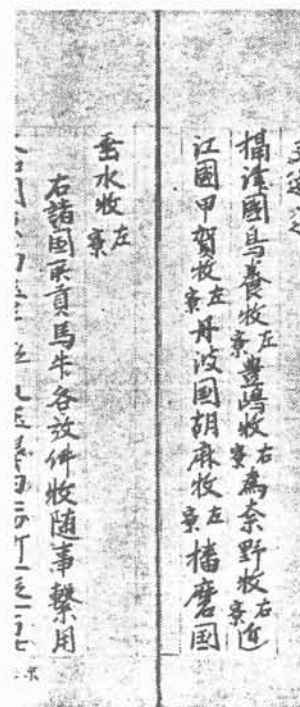
鳥養牧は6牧あった近都牧の一つで、諸国から運ばれた牛馬を飼育し、必要に応じて都にひいてこさせるために設けた牧である。この牧が現在の範囲に広がっていたかははっきりしないが、馬島(淀川本流にかつてあった島)・本牧(字名)・五久(字名)＝「御廐」(字名)などという地名の名残から、ほぼ現在建っている石碑を中心としたあたりと思われる。

▼石碑と顕彰札



▼延喜式卷四八

内閣文庫蔵慶長写本
鳥養牧を左寮と記している
のは右寮の誤記。



23. 鳥養の渡し跡(鳥飼丁3丁目29)

大正時代の中頃に、それまで別々に運航していた「治歩多渡し」と「願正寺渡し」が合併してできた。

慶長19年(1614年)片桐且元が、大坂冬の陣を前に家臣とともに大坂城を退き茨木城(茨木市)へ入った。その時に、この鳥養の渡しを利用したと伝えられる。その後、徳川幕府は寺社奉行に管理させ許可制とした。

明治以降民間運営されていたものが、昭和8年に大阪府の管理運営となり、淀川最後の渡し船となったが、それも昭和50年淀川改修工事を理由に休航し、現在にいたっている。



◀ かつて活躍していた渡し舟

淀川堤防より ▶
渡し場跡を望む



24. 段^{だん}倉^{ぐら}(鳥飼上1丁目19)

古代から近年にいたるまで、淀川流域住民は水との戦いを続けてきた。たび重なる洪水から、年貢の米や生活品を守るため、家の床よりも一段高く石を積み倉を建てたのが段倉である。住民が長い水との戦いの中で生み出した生活の知恵である。今も淀川流域の各所に見られるが、市内には僅かに残るのみとなった。

▼石積みの上に建つ段倉



くろ まる
25. 黒丸城の跡(鳥飼中2丁目1)

黒丸城は、土石を積み重ねて築いた小城であったらしいが、その築城の年代や由来についての詳細は不明である。しかし、永禄2年(1559年)三好長慶や松永久秀が居陣した鳥養、また織田信長が元亀元年(1570年)9月三好党や本願寺との合戦から引き上げ京都へ帰る途中で軍議を開いた鳥養など、この黒丸城との関係が考えられる。そして、当時の地名に黒廻・城ノ前・内殿・地殿などがあったが、これらは黒丸城にゆかりの深い土地かと思われる。

▼黒丸城があったと思われる付近



26. 宗^{そう}慶^{けい}島 (鳥飼上～鳥飼中)

宗慶島は、書道家で鳥飼に住んでいた鳥養宗慶の名をとったもので、年貢50石の川中島で淀川本流の島の一つであった。足利幕府に仕えた宗慶は飯尾流の和様書道を受け継ぎ、新流を開いて鳥養流を名のった人として知られている。

島は里芋畑や麦畑として明治29年まで耕作されたが、大正10年淀川堤防改修のためその土砂を採取したので姿を消してしまった。

▼淀川堤防より宗慶島があったあたりを望む



27. 囲み堤(鳥飼上1丁目・鳥飼和道1丁目)

淀川流域は、昔から長雨や豪雨になると河川は氾濫し、人々は洪水から稲作を守る戦いをくりかえした。集落の境には「縄手」と呼ばれる道路を兼ねた小堤防があつて、輪中を形成していた。

慶長元年(1596年)豊臣秀吉は、大規模な淀川堤防修築を諸国の大名に命じ「慶長堤」(輪道)を完成させる。当時「輪道」は水防施設であつただけでなく、淀川の渡し場で下船した人たちが、西面・富田(高槻市)や大阪方面に往来する道として利用し、また有事の際には軍事的要害となり、経済的・軍事的役割を果たした。

現在も地名として「鳥飼和道」が残っているが、この「和道」も同じ頃に現在の鳥飼大橋北詰から北上し、安威川の南を東進し、「慶長堤」へと続く長大な堤であつた。これらの堤の一部は現在も道路として利用されている。

▼囲み堤(輪道の碑)



28. 実^{さね}正^{まさ}樋 跡(鳥飼上1丁目4)

実正樋が開設され、淀川の水を農業用水として利用するようになった年代は不明である。「さねまさ樋のくちつかせたて……」(高槻市葉間家^{はま}文書)との書状が16世紀中頃のもものと推定されるところから、既にこの頃にはあったと思われる。これが、実正樋が全国で最も古い樋門の一つとされる理由である。

明治年間になってからも、ここからの水が尼崎方面にまで送られ、その役割の大きさがうかがわれる。この樋門は長い歴史の間にたびたび改修され、昭和3年に改修されたのを最後に、三島江(高槻市)に総合樋門が開設された昭和35年に廃止された。



◀実正樋のあった淀川堤防からの眺望
眺望
(右手の建物は府立鳥飼高校)

▼樋門に使われた石



29. 離宮「鳥養院」の跡(鳥飼上4丁目8)

淀川は、平安京より、天王寺・住吉・高野山・熊野への参詣や、西国の任地へ下る地方官が多く利用していた。天皇・上皇をはじめ多くの官人たちの往来が文芸に残され、当時の淀川筋の光景を偲ぶことができる。

その中で「曾我物語」の巻第一に、^{これたか}惟喬親王と中將^{ありわらのなりひら}在原業平が懐旧談にふける条で「今昔の事ども申うけたまはるにつけても、御衣の御袂、しぼりもあへさせたまはず、鳥養の院の御遊幸……」とある。また「大和物語」では^{ていし}亭子院(宇多天皇の号)がここにしばしば訪れたことが書かれている。またこのあたりが^{ごしょがいち}「御所垣内」(字名)といわれていたことから、石碑の建っている付近に離宮があったと思われる。

「大和物語」の中に鳥養という題で大江玉淵の娘の歌として

“あさみどりかひある春にあひぬれば

かすみならねどたちのぼりけり、”

と詠まれている。

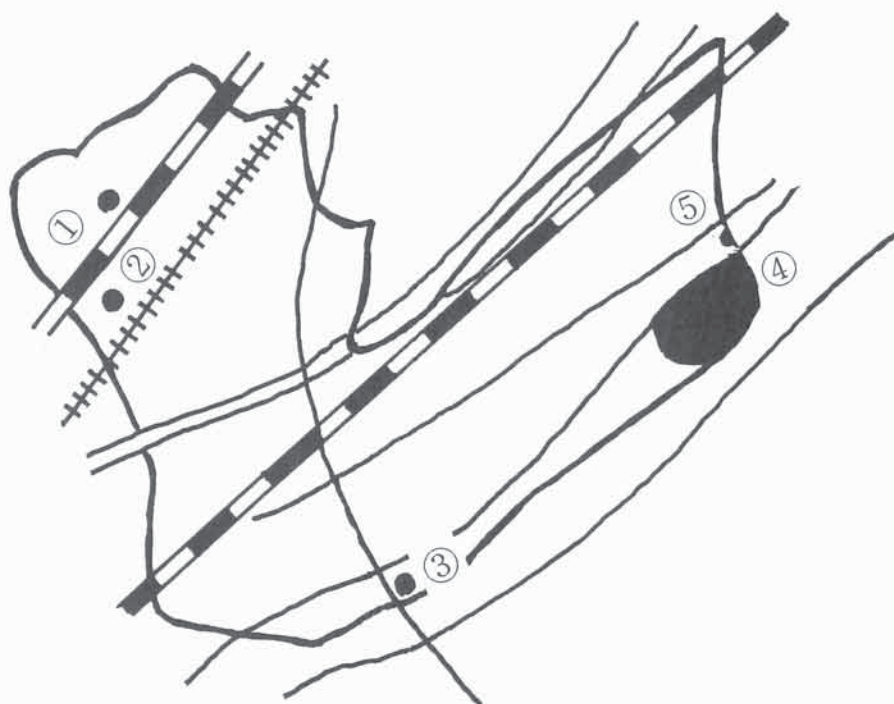
▼石碑と歌碑



30. 埋 蔵 文 化 財

摂津市では現在5ヶ所の埋蔵物包蔵地があります。これは過去の人々の住まいの跡（遺跡）や、いろいろな品物（遺物）が地中に埋まった状態である土地のことです。遺跡や遺物を調査することによって、わたしたちは人間の過去の時代の生活や文化を知ることができます。それはわたしたちの生活や文化（歴史）をつくっていく上で、貴重な遺産であると言えます。

埋蔵文化財包蔵地分布図



- ①蜂前寺遺跡（寺院跡）
- ②明和池遺跡（集落跡）
- ③和道遺跡（集落跡）
- ④淀川川床遺跡（集落跡）
- ⑤柱本南遺跡（集落跡）

めい わ い け

31. 「明和池遺跡」の調査

摂津市教育委員会と大阪府教育委員会文化財保護課では、千里丘東5丁目のマンション建設予定地から土器などが発見されたことで、昭和62年10月～63年1月にかけて明和池遺跡の一部について本格的な発掘調査を行いました。

明和池遺跡は、昭和8年に庄屋1丁目にあった明和池の底土から弥生時代と古墳時代の土器が発見されたことによって知られるようになったもので、今回の発掘地点はこの隣接部分にあたります。

調査ではここに7つの時期の地層が認められ、最も古い時代は弥生時代中期(今から約2000年前)のもので、最も新しい時代は戦国時代(今から約400年前)のものでした。現在も出土した資料の整理が進められ、今まで乏しかった古代から中世の市域のようすが、少しずつ解明されるものと思われます。



◀昭和8年に明和池から出土した土器

発掘作業▶



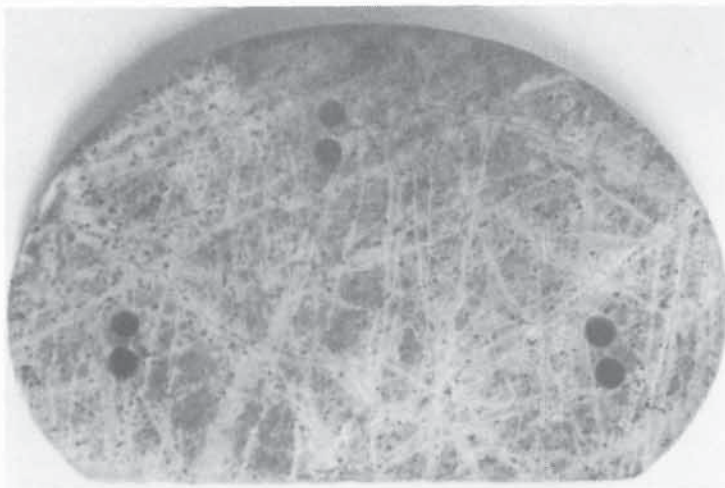


◀ 点々と広がる建物の
掘立柱跡と溝

▼ 今回の発掘で出土した土器の一部



▼ 律令官人がつけていた革帯(ベルト)の飾りで
丸鞆まるともと呼ばれる。(3cm×4.8cm・厚さ8mm)



▼ 北宋銭「至道元宝」



摂津の歴史

(☞ 関係事項の掲載ページ)

	西暦	年号	事項
	BC		
	10000 ごろ		縄文式文化
	300 ごろ		弥生式文化
	AD		
	57		倭の奴国 後漢に遣使 光武帝の印綬を受ける
	107		倭国王 後漢に使者を出す
	239		倭邪馬台国女王卑弥呼の使者 魏に至る
	266		倭の女王耆与の使者 晋に至る
			古墳時代
	552		百済から仏教伝来（一説に538年）
飛鳥時代	593		聖徳太子摂政となる（～622）
	607		小野妹子を隋に遣わす（遣隋使） 法隆寺創建
	630		遣唐使の初め（犬上御田歊）
	645	大化1	大化の改新（年号の初め）
	701	大宝1	大宝律令できる
	708	和銅1	和銅開珎（銀銭・銅銭）を鑄造
	710		3 平城京（奈良）に遷都
奈良時代	712		5 太安麻呂「古事記」を編さん
	720	養老4	舎人親王ら「日本書紀」を編さん
	738	天平10	このころ僧行基 金剛院・常楽寺を建てる（☞2・3・4）
	788	延暦7	和気清麻呂 淀川改修工事を行う（☞15）
平安時代	794		13 平安京（京都）に遷都
	805		24 最澄 唐から帰国し天台宗を開く
	806	大同1	空海 唐から帰国し真言宗を開く
	889	寛平1	このころ宇多天皇がしばしば「鳥養院」を訪れる（☞29）
	901	延喜1	菅原道真 太宰府へ左遷される（☞20）

	西暦	年 号	事 項
平 安 時 代	927	延 長 5	藤原忠平ら「延喜式」を編さん このころ「鳥養の牧」に諸国から牛馬が集められていた(☞22)
	1086	応 徳 3	院政始まる(白河天皇)
	1167	仁 安 2	平清盛 太政大臣となる
	1175	安 元 1	法然 浄土宗を開く
	1185	文 治 1	屋島・壇の浦の戦い 平氏滅ぶ 守護・地頭の設置
	1191	建 久 2	栄西 臨済宗を開く
鎌 倉 時 代	1192	3	源頼朝 征夷大將軍となり鎌倉幕府を開く
	1224	元 仁 1	親鸞 浄土真宗(一向宗)を開く
	1227	安 貞 1	道元 曹洞宗を開く
	1253	建 長 5	日蓮 法華宗を開く
	1274	文 永 11	文永の役(元寇)
	1281	弘 安 4	弘安の役(元寇)
南 北 朝 時 代	1333	(元 弘 3)	鎌倉幕府滅ぶ
		(正 慶 2)	南北朝時代
	1334	建 武 1	建武の中興
	1338	(暦 応 1)	足利尊氏 征夷大將軍となり室町幕府を開く
室 町 時 代		(延 元 3)	
	1392	明 徳 3	南北朝の合一なる
	1397	応 永 4	足利義満 金閣寺を建立
	1404	8	勘合貿易(日明貿易)始まる
	1457	長 祿 1	太田道灌 江戸城を築く
	1467	応 仁 1	応仁の乱起こる(～68)
戦 国 時 代	1489	延 徳 1	足利義政 銀閣寺を建立
	1543	天 文 12	ポルトガル人 種子島に来る(鉄砲伝来)
	1547	16	三宅城落城(☞5)
	1549	18	フランシスコ・ザビエル鹿児島に上陸(キリスト教伝来)
	1568	永 祿 11	織田信長 將軍義昭を奉じて入京
	1570	元 亀 1	石山合戦始まる(～1580)
	1573	天 正 1	室町幕府滅ぶ

	西暦	年 号	事 項
安土・桃山時代	1580	天 正 8	勝久寺 織田信長の軍に焼き打ちにあう (四6) 木下勘兵衛の戦死 (四12)
	1582	10	本能寺の変 山崎合戦 太閤検地 (~98)
	1586	14	豊臣秀吉 太政大臣となる
	1590	18	豊臣秀吉 全国を統一する
江戸時代	1592	文 禄 1	文禄の役 (秀吉の朝鮮侵略 1597に再出兵=慶長役) 織田尚長 味舌に生る (四11)
	1596	慶 長 1	豊臣秀吉「慶長堤」を完成させる (四27)
	1600	5	関ヶ原の戦い
	1603	8	徳川家康 征夷大將軍となり江戸幕府を開く
	1614	19	片桐且元「鳥養の渡し」を渡り茨木城に入る (四23) 大坂冬の陣
	1615	元 和 1	大坂夏の陣 豊臣氏滅ぶ 常楽寺炎上 (四4)
	1635	寛 永12	織田尚長 味舌天満宮社殿を建立 (四11)
	1637	14	島原の乱
	1639	16	鎖国
	1651	慶 安 4	永井直清 鳥飼井路の掘削を行う (四14・18)
	1700	元 禄13	常楽寺再建 (四4)
	1716	享 保 1	享保の改革—徳川吉宗
	1772	安 永 1	田沼意次 老中となる
	1787	天 明 7	寛政の改革—松平定信
	1825	文 政 8	異国船打払令
	1837	天 保 8	大坂市中で大塩平八郎の乱起こる
	1841	12	天保の改革—水野忠邦
	1854	安 政 1	日米和親条約調印
	1858	5	日米修好通商条約調印
1867	慶 応 3	大政奉還	
明治時代	1868	明 治 1	明治維新 淀川大洪水
	1869	2	版籍奉還
	1871	4	廃藩置県
	1872	5	学制発布 (四10)

あ　と　が　き

わたしたちの祖先が営々として築き上げた歴史は、決して平坦なものではありません。

摂津市に残る文化財や史跡等は、それらを物語る一つです。わたしたちはこれらの貴重な遺産を、次代へと永く伝えていかねばならない使命をもっています。

本冊子は、摂津市の歴史を知っていただき、郷土“せつつ”を認識するうえで好適な手引書として活用するとともに、文化財・史跡巡りマップを添付し、具体的な場所も知っていただけますよう工夫し発行いたしました。

各項目の説明については、摂津市史・大阪府全誌等を参考にしながら聞きとりも含めて検討を重ねたつもりですが、なお不十分なところも多いかも知れません。また本冊子に掲載されなかったものもまだ数多くあると思います。それらも、今後調査研究のうえお知らせしたいと考えています。

最後に、編集に際し、監修及び資料提供いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

摂津市教育委員会

祖先のあゆみ

摂津の歴史

昭和63年3月初版 平成4年11月改訂

平成7年3月改訂

監 修

摂津市文化財保護審議会

編集・発行

摂津市教育委員会 生涯学習部 生涯学習課

〒566 摂津市三島1丁目1番1号

電話 06(383)1111 0726(38)0007

印 刷

上田企画印刷

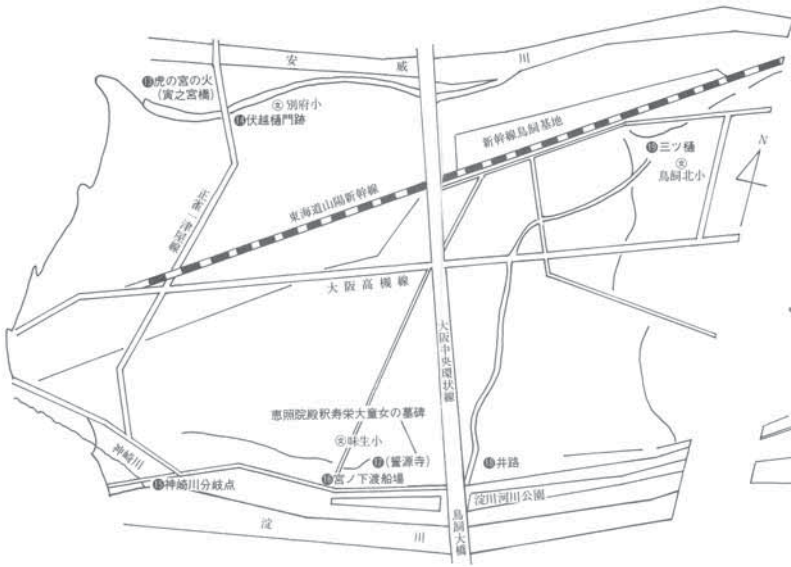
北部モデルコース (5.8km)

防風庵跡 $\frac{0.2\text{km}}$ 宝光山常楽寺跡 $\frac{0.3\text{km}}$ 三宅城跡 $\frac{0.7\text{km}}$ 流れの馬場 $\frac{0.1\text{km}}$
 条里制 $\frac{2\text{km}}$ 明善寺 $\frac{0.4\text{km}}$ 味舌天満宮 $\frac{0.6\text{km}}$ 井関敬順師顕功碑 (慶徳寺)
 $\frac{0.3\text{km}}$ 子安地藏 $\frac{0.5\text{km}}$ 弥栄の樟 $\frac{0.7\text{km}}$ 蜂塚・不動明王立像 (金剛院)



南部モデルコース (3.7km)

虎の宮の火(寅之宮橋) 0.4km 伏越樋門跡 1.7km 神崎川分岐点 0.7km
 宮ノ下渡船場 0.3km 恵照院殿釈尊大童女の墓碑(誓源寺) 0.6km 井路



東部モデルコース (6.4km)

三ツ樋 1.3km 藤森神社 0.5km 三本松天神社跡 0.5km 鳥養の渡し 0.3km
 鳥養牧跡 0.5km 段倉 0.8km 黒丸城の跡 0.8km 宗慶島 0.5km 閉み堤 0.3km
 実正樋 1.1km 離宮「鳥飼院」の跡

